

モリエールの結婚

進藤, 誠一

<https://doi.org/10.15017/2556622>

出版情報 : 文學研究. 27, pp.117-132, 1940-07-25. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :

モリエールの結婚

進 藤 誠 一

一六六二年、二月二十日、モリエール (Molière) はアルマンド・ベジャール (Armande Béjart) と結婚した。このアルマンドなる女性の身分がはつきりしない爲に、モリエールの評傳家達の間には微細な穿鑿が數多く行はれ、相矛盾する憶説が續出し、今日まで決論を得るに至つてゐない。この問題は非常に微妙であつて、恐らくは未來永劫に解決に達することはあるまいと思はれる。

我々としては文獻も乏しく、フランス社會の風俗、習慣にも暗いことであるから、モリエール研究家達の論争の中に踏み込む資格も無く、またその意志も持たないが、問題が現在に於て如何なる段階に達してゐるかを、一應検討しておくことは必要であると考へる。ミシヨール (Gustave Michaut) の『モリエールの發足』*Les Débuts de Molière* の中に、この問題に關する眞面目な論述がある。いはば從來の論争の總決算をなしてゐるものであるから、これによつて一と通り從來の研究と發見とを跡づけ、ミシヨールの結論の當否を判斷してみようと思ふ。但し文獻再録の點ではアシエット (Hachette) 發行のモリエール全集に收められてゐるメーナル (Paul Mesnard) の評傳が最も完備してゐるから、これを援用する。

第一に言ふべきは、モリエールの同時代の人々は、アルマンドがマドレーヌ・ベジャール (Madeleine Béjart) の娘

であることを信じて疑はなかつたらしいといふことである。そしてモリエールを陥れようとした彼の敵達は、アルマンドがマドレーヌとモリエールとの情事から生れた秘密の子であることを或は明言し、或はほのめかしてゐるのである。その例として擧げられる材料を列擧してみると、

一、一六六三年、十二月、ラシーヌ(Jean Racine)はル・ヴァスール法師(L'abbé Le Vasseur)に手紙を送つて曰く、
Montfleury a fait une requête contre Molière et l'a donnée au roi. Il l'accuse d'avoir épousé la fille et d'avoir
autrefois couché avec la mère. Mais Montfleury n'est pas écouté à la cour.

(モンフルーリーはモリエールを非謗する請願書を作り、王に提出しました。彼はモリエールが娘を娶り、しかも昔その母親と關係してゐたと告發してゐます。然し宮廷ではモンフルーリーの言ふことに耳を藉す者はありません。)

註 モンフルーリーは藝名で、本名は Zacharie Jacob と呼ぶ。モリエールがその作『ザエルサイエの即興』*L'Impromptu de Versailles* の中でブルゴーニュ宮劇場(Hôtel de Bourgogne)の名優連を揶揄し、就中モンフルーリーの誇大な朗吟調を嘲弄したので、それを根にもつて、この請願書を提出したのである。

二、一六七〇年、ル・ブーランジュ、ド・シャルマゼー(Le Boulanger de Chaussey)は『ヒロミール・イポコンドル』*Elomire Hypocandre* なる喜劇を發表したが、その第一幕、第二景に於て次のやうな臺詞を書いてゐる。

(Elomire)

Arnolphe commença trop tard à la forger;

C'est avant le berceau qu'il y devoit songer,

Comme quelqu'un l'a fait……

(L'Interlocuteur)

On le dit……

(Elomire)

Et ce dire

Est plus vrai que le jour……

(エロミール——アルノルフは妻の鑄造を始めるのが遅かつたのです。搖籃以前にそれを考へなければならなかつたのです、誰かがやつたやうに……)

(對話者——さういふ噂です……)

(エロミール——その噂はお天道様と同じほど本當なのです……)

更に同第三景に於て作者はエロミールに次の如き臺詞を言はせてゐる。

……Qui forge une femme pour soi,

Comme j'ai fait la mienne, en peut jurer sa foi.

(私がやつたやうに自分の妻を自分で鑄造する者は、妻の貞操について確信をもつことができます。)

註 『エロミール・イボコンドル』は一六七〇年、パリで刊行せられた。勿論モリエール攻撃の目的で書かれたもので、Elomire は Molière のアナグラムである。モリエールはこれに對し訴訟を提出し、この脚本は沒收せられ、遂に上演せられなかつた。

三、一六八八年、『有名なる女優』 *La Fausse Comédienne ou Histoire de la Guérin, auparavant femme et veuve*

モリエールの結婚

de Molièreなる中傷的冊子がフランクフルトに於て出版せられた。その中に次のやうな一節がある。

La défunte Béjard, comédienne de la campagne,faisait la bonne fortune de quantité de jeunes gens de Languedoc, dans le temps de l'heureuse naissance de sa fille. Il serait assez difficile, dans une galanterie si confuse, de dire qui en était le père; tout ce que j'en sais, c'est que sa mère assurait que dans son dérèglement (si on en excepte Molière) elle n'avait pu souffrir que les gens de qualité, que par cette raison, sa fille était d'un sang fort noble On l'a crue fille de Molière, quoique depuis il ait été son mari; cependant on n'en sait pas bien la vérité.

(旅廻りの女優であつた故人ベジャールは……その女子の誕生した幸運な時代に於て、ラングドック州の多數の若者達に満足を與へてゐた。かゝる亂雑な戀愛生活に於てその女子の父親が誰であつたかを言ふことはかなり困難であらう。私の知つてゐることは唯その母親が、その不身持の中にも、——モリエールを除いては——貴族の身分の人でなくては相手にする氣になれなかつた、従つて、彼女の娘は非常に高貴な血をうけてゐると確言してゐたといふ一事である。……その女子はモリエールの娘であると信ぜられた、もつともその後に至つてモリエールはその夫になつたのではあるが。だが然し事の真相はよくは分らない。)

四、ボワロー (Boileau) がブロッセット (Brossette) に向つて次のやうに言つたといふことが、ブロッセットの手記の中に記されてゐる。

M. Despréaux m'a dit que Molière avoit été amoureux, premièrement de la comédienne Béjart dont il avoit épousé la fille.

(デプレオー氏が私に申されたには、モリエールは最初女優ベシヤールを愛した。これは彼が妻にした女の母である。)

註 ボワローの崇拜者であり、その全集を編纂したプロセツトが、ボワローの口から出た言葉を書きつけたものが所謂『プロセツトの手記』である。右の一條は一七〇二年の十月乃至十一月の手記である。

五、ルイ十四世の王弟フィリップ・ドルレアンの用人頭 (intendant général) であつたギシヤール (Guichard) なる男が、一六七六年にルルリ (Lulli) と訴訟を生じた時、相手方ルルリ、及びルルリが證人として名前をあげた人々を傷ける爲の請願書を書いて提出してゐるのであるが、證人の一人なるアルマンド (モリエール未亡人) について、次の如く書いて居る。

Tout le monde sait que la naissance de la Molière est obscure et indigne, que sa mère est très incertaine, que son père n'est que trop certain, qu'elle est fille de son mari, femme de son père, que son mariage a été incestueux……qu' en un mot cette orpheline de son mari, cette veuve de son père et cette femme de tous les autres hommes n'a jamais voulu résister qu'à un seul homme, qui était son père et son mari.

(これは世間の誰もが知つてゐることであるが、モリエール夫人の出生は曖昧で且つ汚らしいものである。その母については甚だ不確かであり、父についてはあまりに確かである。彼女はその夫の娘であり、父親の妻であり、その結婚は父子相姦である……、一言にしていへばこの夫の孤兒、父の寡婦、他のすべての男性の妻である女は、唯一人の男性をのみ拒んだのである、それは彼女の父であり且つ夫であつた。)

註 このギシヤールといふ男は、アルマンドの義兄にあたる Aubry des Carrières の妹を情人としてゐたし、モリエール一座の俳優連とも交際があつた位であるから、モリエールの家庭の事情には相當通じてゐたものと見なければならぬ。

六、かくの如くアルマンドがマドレーヌの娘であるとの説が大いに流布してゐたので、『モリエール傳』*La Vie de M. de Molière*の作者グリマレー(Grimarest)もこの説をそのまま採用し、唯父子相姦の汚名をモリエールの爲に雪してゐる。

Molière, en formant sa troupe (de l' Illustre Théâtre), lia une forte amitié avec la Béjart qui, avant qu' elle le connut, avait eu une petite fille de M. de Modène, gentilhomme d'Avignon, avec qui j'ai su, par des témoignages très assurés, que la mère avait contracté un mariage secret. Cette petite fille, accoutumée avec Molière, qu'elle voyait continuellement, l'appela son mari dès qu'elle sut parler.

(モリエールはその一座(貴顯劇場の)を作る時、女優メジャールと深い友情を結んだ。このメジャールは未だモリエールと相識る前に、アヴィニョンの貴族、ド・モテーヌ氏との間に一人の女の子を生んでゐた。母親はこの貴族と秘密の結婚をしてゐたといふことを、私は確かな證言によつて知つた。この女の子は始終モリエールを見てゐたので彼に馴染んで、ものが言へるやうにならなから彼を自分の旦那様と呼んでゐた。)

大體以上がモリエールと同時代、即ち十七世紀に於てアルマンドの身分に關する文獻として知られてゐるものである。これ等を通覽すると、モリエールの同時代人がアルマンドをマドレーヌの娘と考へてゐた、少くともそれが常識的の考へ方であつたと思はれる。十八世紀に於てもこの通念は繼承せられ、ヴォルテール、ペール等もこの説を信用してゐたのであつた。

ところが十九世紀に入つて、一八二二年に、ベッファラ(Beffara)が『ジャン・ベチスト・ボ克蘭・ド・モリエールに關する論考』*Dissertation sur J.-B. Poquelin de Molière*なる著述を出したが、その中にモリエールとアルマンドと

の結婚の證書が掲載せられたのである。(Registre de la paroisse Saint-Germain-l'Auxerrois より轉載。)これによると、新婦アルマンドの身分は次のやうに記載せられてゐる。(メーナルの『評傳』第四七一頁に轉載せるものより。)

Armande-Grésinde Béiard, fille de feu Joseph Béiard et de Marie Hervé

(アルマンド・クレザンド・ベジャール、父、亡ジョゼーフ・ベジャール、母、マリー・エルヴェ)

これによつて見れば、アルマンドは明かにマドレーヌの妹である。これは正に世人をあつといはせるに足る重大なる新発見であつた。

次で一八六三年に、スーリエ (Soulie) が『モリエールに關する穿鑿』*Recherches sur Molière* を出し、多數の文獻を發表した。その中にはモリエールの結婚契約書もあるし、また一六四三年三月十日附の非常に有益かつ興味深き Renouciation de Marie Hervé pour ses enfans à la succession de Joseph Béiard leur père (トリー・エルヴェがその子供等の爲に、子供等の父ジョゼーフ・ベジャールの相續を放棄する證書) なる公文書があるのである。(メーナルの第四七一頁に轉載す。) この文書の中に次の如き一節がある。

au nom et comme tutrice de Joseph, Madeleine, Geneviève, Louis et une petite non baptisée, mineurs du défunt et [d'] elle,

(故人と彼女との未成年の子供達、ジョゼーフ、マドレーヌ、ジュヌヴィエーヴ、ルイ及び未だ洗禮を受けざる一人の幼女の代理且つ後見人として、)

この文書の中に「未だ洗禮を受けざる一人の幼女」といふのがアルマンドのことであるとすると推定は、結婚證書、結婚契約書と照し合せて、容認することができるであらう。かくして、アルマンドがマドレーヌの妹であるとの事實は公文書に關する限り明白となつたのである。

以上の如き公文書の發見が従來行はれてゐた幾多の憶説を抹消したのは事實である。然しいづこの國でもさうである如く、戸籍面に記載せられてある身分關係を、絶對的事實であると信ずるには、よほど單純な頭を持つてゐなければならぬ。殊に娘の生んだ子を娘の兩親の子として届け出せることは、虚偽申告の中で最もありふれた場合である。従つて如上の公文書の發表も、モリエールの生存中から謂はゞ定説となつてゐたマドレーヌ、アルマンド母子説を、完全に克服することはできなかつた。然し従來と異り、戸籍簿記載の事實を覆すためには、かゝる虚偽の申告をする必要があつた事情を證據だてることが必要となつた。

この方面の論者は數多いが、その最も新しく、最も無理の少いのはジュール・ロワズルール (Jules Loiseleur) の『モリエールの生涯に於ける曖昧なる諸點』 *Les Points obscurs de la vie de Molière* (1877) に於ける論である。

即ちマドレーヌはかねてド・モデーヌ氏なるアヴィニョンの貴族と關係があり、既に一六三八年にフランソワーズなる女子を生んでゐるが、その後ド・モデーヌと別れた後も、彼の側室 (Épouse de la main gauche) たることを望んでゐた。(ド・モデーヌには正室あり。) 然るに一六四四年頃、マドレーヌは南佛プロヴァンス州のある地で、更に一女を生み落したが、このことがド・モデーヌに知れると、その不貞が暴露することになり、彼との縁が切れる恐れがあつたので、さてこそ母のマリー・エルヴエが我が子として入籍したのであると。

この説は正確なる事實に基くものであつて、どこといつて反證をあげて駁すべきところを持つてゐないが、それだけに力弱く、單なる憶説の域を出でない。

そこでその後のモリエール評傳家達の意見は如何といふに、ミシヨの調査によれば大略次の如くである。

アルマンドはマドレーヌの娘であり、戸籍面のみ妹となつて居るものであると信ずる人々、

Livet: *Edition de La Famense Comédienne*. (これは前記フランクフルト發行の匿名の冊子の内容を、リヴェーが一八七六年に翻譯せしもの。その書の序に於けるリヴェーの所説。)

Bernardin: *Hommes et Mœurs du XVII^e siècle*.

Rigal: *Molière*.

Lefranc: *Revue des Cours*, 1907—8.

Donnay: *Molière*.

その他

Jules Lemaitre もこの憶説を嫌つてはゐなからうである。(*Journal des Débats*, 18 jan. 1886.)

Paul Mesnard もこの意見に傾してゐる。

Laour もこの方であるが、彼は「結論しないのが最も學問的態度である」と宣言してゐる。

これに反し、公正證書を信じ、アルマンドをマドレーヌの妹であると信ずる人々は、

Gaston Paris: *Revue critique*, 3 aout 1875.

Louis Moland : Préface de l'édition de Molière.

Larroumet : *La Comédie de Molière*.

等の人々である。

さてミショーは、最後に自分の意見を述べてゐる。それを要約すると次の通りである。

問題は未解決のまゝである。そして三つの要點を含んでゐる。

一、アルマンドはマドレーヌの妹か娘か。

二、娘とすればフランソワズ(ド・モデーヌの女)か、その妹か。

三、フランソワズの妹とすれば、父はモリエールか。

余はこの問題を検討するに當り、次の諸事項は無視する。

一、感情的論據、例へば「モリエールがかくかくのことを爲し得たと考へるのは厭である」とか、「モリエールはかくかくのことは爲し得ない」といふ如き。

二、グリマレールの證言。その内容は一々公文書によつて覆されてゐる。これは一の小説にすぎない。

三、小冊子作者(Pamphletaire)達の攻撃。モンフルーリーの請願書、『エロミール、イポコンドル』、『有名なる

女優』ギシャルルの請願書等。

四、論據薄弱なる議論、例へば、

——モリエールの結婚が謂はゞ秘密結婚であつた。——かゝる事實なし。何等異常なること無し。

——ラ・グランジュ (La Grange) がその記録の中でアルマンドの両親の名を記さざりし。——何等不思議なし。

——モリエールの側近者達は真相を知つてゐた。——信じ難し。

——ジュヌヴィエーヴ・ベジャールのみがアルマンドの結婚の契約にも、式にも参列せず。——推定に過ぎず。また出席せざりしとせば相當の理由ありしならん。

——アルマンドが常に四つの名前 (Armande-Claire-Elisabeth Béjart) を署名せしこと。——何等不思議なし。

——ド・モデーヌがモリエールの第二子の名親となりしこと。——不思議なし。

——モリエールの多くの戯曲に於て、子供の身分の變更が取扱はれてゐる。——かゝる論據はむしろ滑稽なり。以上の諸項を除く時、残る問題は次の六つに歸着する。

一、モリエールの沈黙。

二、ボワローの證言。

三、マリー・エルヴェの出産の年齢。

四、マルマンドの嫁資の豊富なりしこと。

五、マドレーヌのアルマンドに對する母性愛。

六、一六四三年の相續放棄の公文書に見出されるゝ疑點。

ミショーはこの六つの問題を二つ二つ檢閲してゐる。

一、モリエールは何故に、多くの非難に對し公開的に辯駁をしなかつたか。例へば結婚證書を友人の一人に讀ませ

る等の方法をとらなかつたか。——これに對してはモリエールは『ヴェルサイユの卽興』の中で立派に答へてゐる。

「禮儀にも限度があるべきであつて、ある種の事柄は觀客を笑はせもしなければ、話題の本人を笑はせもしない。私の作品や、私の顔や、私の身振りや、私の言葉や、私の聲音や、私の口跡や、そんなものを彼等が利用することができないのならば、それを何にしようか、何を言はうかと私は快く放任しておく。そんなことに私は決して反對するものではないし、それで世間を喜ばすことができたなら大満足に思ふだらう。然しそんな事柄を彼等に放任する代りには、彼等はその他の事は私に残してくるべきであり、現に彼等がその喜劇の中で私を攻撃してゐるといふ話の事柄などには觸れないでくれるべきだ。このことを私は彼等の爲におせつかいにも筆をおとりなさるあの禮儀正しい紳士に、恭しく歎願するつもりであり、これが彼等が私から受ける一切の返事である。」(第六景。)

この種の攻撃に對し、公正證書が大なる威力があると考へるのは單純すぎる。その上モリエールが聲を大にして陳辯することは、マドレーヌの過去を白日にさらすことである。この問題をできるだけ穩便に採み消さうと努めたモリエールの態度は稱讚せらるべきである。

二、ボワローの證言は一見したところ決定的のやうに見える。——然しよしんばボワローがプロセツトにあの言葉を述べたといふ事實が證明せられたとしても、問題は決定せられてゐない。ボワローがさう信じたといふのみであつて、彼が真相を知つてゐたといふことにはならない。その上ボワローが果してさう言つたか否か確かではない。プロセツトが聞き違へたかも知れないし、また聞き違へなかつたとしても、自分の信じてゐた通りに書き直したかも知れない。

三、公正證明の記載に拘らず、マリイ・エルヴェがアルマンドを生んだとしてはあまりに年をとりすぎてゐる。——マリイ・エルヴェの死亡したのは一六七〇年一月三日で、八十歳であつたといふのが死亡證書の記載である。然し彼女の墓碑銘によれば七十五歳となつてゐる。他方アルマンドの生れたのは相續放棄の公文書から見ても一六四三年三月十日より前であることは間違ひがない。然らばマリイ・エルヴェは五十二歳乃至四十七歳で子供を生んだことゝなる。これは普通ではないかも知れないが、全く前例の無いことではない。しかも「D」によれば、マリイ・エルヴェは一六三二年と一六三九年とも分婉してゐるのである。

四、モリエールの結婚契約書によれば、アルマンドは一萬リーヴル・ツルノワの婚資を持參してゐる。マリイ・エルヴェにこれほどの金があつたとは考へられない。これはマドレーヌが名前を出さずに與へたものと考へなければならぬ。——なるほど母親にはそんな財産は無かつたと考へるべきであらう。がそれだからといつて、直ちにマドレーヌの賜物と斷定することはできない。かゝる場合によくある如く、夫たるモリエールが愛する新妻の爲に設定してやつた假想婚資であつたとみる方が更に妥當である。

五、よしんばまたこの婚資がマドレーヌの贈物であつたと假定しても、また彼女が遺言狀でアルマンドを包括受贈者と定めた事實、また彼女が Gesinde といふ珍奇な名前をアルマンドに與へた事實、また妾がアルマンドとモリエールとの間に生れた子供の名親となつた事實、これ等のすべての事實からマドレーヌがアルマンドの母であつたとの結論が出てくるものではない。兩人が姉妹であつたとしても、このやうなことは起り得るものである。

六、一六四三年、三月十日附の、マリイ・エルヴェがその子供達の爲に亡夫の相續財産を放棄した證書は、アルマン

ドがマリー・エルヴェの女であることを證する重要な公正證書であるが、この證書の内容に多くの疑點が見らるゝことは、アルマンの身分を糊塗しようとした結果ではないか。即ち親族會議の構成員の中に親族が一人しか居ないこと、その親族が後見監督人 (subrogé-tuteur) になつて居らぬこと、等は親類の人々がこの件に深く關與することを拒んだ結果ではないか。またマドレーヌ及びジョゼーフは成年に達してゐた筈であるのに、一律に他の子供達と一緒に未成年の扱ひを受けてゐるのは、成年であれば當然親族會議の一員とならねばならず、従つてこの虚偽の身分申告について萬一發見の場合責任を負はねばならないので、かくは未成年者の待遇を與へたのではないか。——かくの如き議論は一つの先入見を持って、これを裏書する爲に専ら憶測を逞うしたものに外ならない。マドレーヌはその當時は成年であつたが、父親の死亡の時二十五歳未満であつたとしたら、未成年者と見做されることも不思議ではない(彼女は一八一八年一月八日受洗してゐる。) またジョゼーフは筆頭に書かれてはゐるが、それだから彼がマドレーヌより年長であつたと斷定することはできない。

ミシヨは以上の如く所論を進めた後、結論として次の如く言つてゐる。

結局、アルマンはマリー・エルヴェの娘であり、マドレーヌの妹であるといふことになる。公正證書が儼存してゐるのである。その價值を否定しようとするあらゆる努力は、現在のところ水泡に歸してゐる。ガストン・パリスが卓抜に喝破してゐる如く、「それは誠らしさの片影さへも持たない。かゝる無用にして根據を缺ける憶説を確立せんとする頑固さの中に、吾人は先入見の力強さの一つの例を見得るのみである。」

以上がミシヨの所論の要旨であり、その結論である。ミシヨはガストン・パリスと共に姉妹説に左袒してゐる。

彼は先に問題を三つの要點に分つてゐるが、第一の問題に於てアルマンドをマドレーヌの妹と斷定した故に、第二、第三の問題は彼にとつては解消したわけである。

今つく／＼とその推論のあとをたどり、かつ結論を見る時、吾人を納得せしめ得ざる何物かのあるのを感じる。就中ミシヨーが列擧してゐる六つの條項の中、第四、第五、第六の三項はミシヨーの言ふ通り、何等母子説の根據となり得るものではないが、第一、第二、第三の各項については、ミシヨーの論を以て、完全にその價値を失へるものとは考へられないのである。モリエールの沈黙、ボワローの證言、マリー・エルヴェの出産年齢をミシヨーの如く解釋するには、やはり一個の先入見を必要とするであらう。然りミシヨーは姉妹説の先入見を持し、その結論に到達する爲に、汝々として障碍たるべき材料を一つ／＼抹殺してゆかうとしてゐる。右に述べた第一、第二、第三の條項の如きは、親子説を主張せんとする人にとつては、甚だ有力なる論據となるに違ひないのである。

畢竟ミシヨーの論據は一六四三年三月十日の文書である。(結婚契約書、結婚證書も所詮この文書に基いてゐるに過ぎない。)然るにこの文書に何等の疑點が存しないことが證明せられたとしても、アルマンドの身分について虚偽の申告のあり得ることを妨げないのである。マドレーヌが何故に實子を母の子として届けなければならなかつたか、その理由が提出せられ得ないのが親子説の弱點である。然しミシヨーの慣用語に従へば、吾人の知らない理由がいくらかあり得るのである。とはいへ吾人は直ちに親子説に左袒するものでもない。それ等の説は非常に有力であり、魅惑的でさへあるが、憶説の域を脱すべき根據を缺いてゐる。

ミシヨーは「モリエールはかく／＼のことはなし得ない」といふ如き論據を感情的論據として無視する旨宣告し、

「最も正しき人々も、凡惱の爲には最悪の過失、否犯罪さへも行ひ得るに至ることを認めなくてはならぬ。」(Las
Debus de Molière, p. 151.)と論斷してゐる。なるほど凡惱の導くところ、人は一時的熱狂の爲に過失、犯罪を犯す
ことは認めなくてはならない。然し過失にも種類がある、また犯罪は犯しても過失は犯さないこともある。モリエ
ルが我が子と知りつゝアルマンドを妻とし、公然と親戚知人立會の下に結婚し、十年の久しきに亘り同棲したといふ
やうなことは、如何に反對の證據が存在しないといつても、吾人の考へ得ざるところである。この種の問題に關して
はミシヨの所謂感情的論據が大いに有力であると信ずる。故に問題はアルマンドがマドレーヌの妹であるか、それ
ともモリエール以外の何人かを父とするマドレーヌの女であるか、に限られる。(モリエールが父であつたか否かの
問題については、モリエールが結婚したといふ事實が、絶對の反證である。)而してこの問題はもはや永久の謎とし
て残されるほかは無いであらう。